

平成15年度国語部会研究主題

1 研究主題

生きる力が育つ国語科授業の創造 主体的・自覚的にことばを学ぶ子どもを育てる学習指導と評価

2 研究主題設定の理由

変化の時代と言われる21世紀を主体的に生きるためには、生きて働くことばの力を身に付けるとともに、自他のことばを尊重する心情や態度を育てることが大事になる。特に、国語科においては、ことばを通して豊かに他とかかわり合う中で、自己実現していく子どもを育てることが求められる。

本県では、平成12年度より「生きる力が育つ国語科授業の創造」を主題として、実践研究に取り組んできた。子どもが主体であるという教育の原点を見据え、指導者は、一人一人の子どもに生きる力が「育つ」ことに意を注ぎ、「育つ」ように学びの場を設け、さまざまに手引きしてきたのである。一昨年度の研究会会場校石井小学校からは、国語能力系統表や「総合的な学習の時間」との連携を図った授業が、昨年度の研究会会場校浦庄小学校からは、評価規準と判断基準を明確化した授業がそれぞれ提案され、一人一人の子どもをとらえた指導・支援がなされてきた。この一連の実践研究を通して、ことばの力を系統的にとらえること、年間を見通し取り組むことや、一人一人のことばの生活の実態を把握することが、一時間の授業を生き生きとしたものにし、意義深いものにするのであるということが実感されることになった。また、ことばの力を系統的にとらえ、身に付けさせたいことばの力を焦点化することは、評価規準と判断基準を明確にすることになってきた。そして、一連の実践研究は、評価計画を立案し具現化することと重なり、その評価のあり方を求める活動へと結び付いていった。これらの一連の流れは、子どものことばの生活や学びを見つめた指導とそれらをとらえた評価とを結び付けて、一人一人の内に生きる力が育つ国語科授業を創造していこうとするものである。

教育課程審議会からは「児童生徒の学習と教育課程の実施状況の評価のあり方について」の答申がなされ、目標に準拠した評価（いわゆる絶対評価）を重要視することや、指導と評価の一体化を図るといった評価の考え方が示された。それを受け、国立教育政策研究所からは、評価の規準が示され、基礎的・基本的な内容の習得とともに生きる力を育成するための評価のあり方が問われるようになってきた。さらに、徳島県教育委員会からは、「評価及び指導要録の手引き」が示され、生きる力が育つうえで、子どもが主体的に活動する場を通してことばの力を獲得するような学びを創出するとともに、そこで指導と評価を一体化させることが大きな意味をもつことになった。

これらのことを受け、本年度は、生きる力が育つために、一人一人の子どもたちの何をどうとらえ、どのように評価し、どのような指導を展開すればよいのか、指導と評価の一体化をめざして研究を深めていきたいと考え、本研究主題を設定した。

3 研究主題についての考え方

(1) 「生きる力が育つ国語科授業」とは

「生きる力」とは、「自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動することによって、よりよく問題を解決する資質や能力」と「自らを律しつつ、他人を思いやる心や感動する心を持った豊かな人間に備わった力」であり、子どもが主体的・自覚的に学習をすることを通して育つものである。生きる力は国語科においては次のような力に分析することができる。

- ① 生活の中で言語を豊かにしていく力
- ② 言語による文化を享受し、創造する力
- ③ 言語を介して伝え合う力
- ④ 言語を介して情報を活用し産出する力
- ⑤ 言語によって思考する力

このような力が育つためには、子どものことばの生活をとらえたうえで、年間を見通し、いつ、どのような内容を取り上げ、どのような言語活動を経験させるのか。それを通して、どのようなことばの力を身に付けるようにするかなど、それぞれの単元のねらいを明確に位置付けるとともに、指導と評価を一体化させて学習を展開することが大事になってくる。

(2) 「主体的・自覚的にことばを学ぶ子ども」とは

一人一人の子どもが主体となって言語活動に打ち込む過程でこそ、生きて働くことばの力を身に付けることができる。そのような単元・授業を構想するとともに、主体的に学ぶ力そのものを育てることへも意を注ぎたい。さらに、ことばやことばを学ぶことへの自覚を深めていかなければ、学ぶ力も育たないし、生きて働くことばの力も十分には身に付かないであろう。自己評価力の育成と重ねながら指導することが求められる。

以上のことから「主体的・自覚的にことばを学ぶ子ども」として、たとえば、次のような姿が考えられる。

- ① 自己のことばの生活の中から、価値ある課題を発見する力、また、ことばの生活や文化についての課題を育てていく力や問い続ける力を有する子ども
- ② 情報の収集、選択など、課題を解決したり、自己の考えをつくり出したりするために、「話す・聞く」「書く」「読む」など言語活動を豊かに展開することができる子ども
- ③ 一人で考えるだけでなく、自己の考えを伝え合いながら、よりよい考えをつくり出していくために「話す・聞く」「書く」「読む」言語活動を豊かに展開することができる子ども
- ④ 一連の学習を通して、ことばの学びの過程や成果を確認することができ、新たな学びへの意欲へと変えていく子どもや、振り返る習慣をもつなど評価への目を有する子ども

このような「主体的・自覚的にことばを学ぶ」子どもは、単元学習の理念が生かされた国語科授業が展開される中で育ってくる。その際、指導者は次のことに留意しなければならない。

- ① 一人一人の子どものことばの生活を見つめ、どのようなことばの力を身に付けることがその子にとって大切なのかをとらえること。言い換えれば、その子が生きるために必要なことばの力をとらえることから、単元が構想され、そこでの言語活動が生まれてくる。
- ② そこでの学びが、その子にとって価値ある課題として、学習の対象に据えられていること。そのためには、子どものことばの生活に深く根ざした単元が構想され、必然性のある学びが組み立てられていくことが必要になってくる。
- ③ 言語活動を通してことばの力を生きて働く力として、また、生活（生きること）に根ざした力として、より確かに、かつ豊かに身に付けること。言語活動がめあてとなるのではなく、

その中でどのようなことばの力を育てるかという見極めと、どう発展させながらそのことばの力を育てていくかという見通しが求められる。

(3) 「評価」とは

副主題に「学習指導と評価」という文言を取り入れることにより、指導と評価を一体のものとしてとらえ、昨年度までに研究が進められてきた評価規準や判断基準の考え方、評価計画などを学校や学級の実態に合わせて充実させ、生きる力が育つ国語科授業を創造していきたいと考えた。

本研究では、学んだ結果を評価することとともに、学びの過程や学ぼうとする意欲や態度を継続的に評価していくことを重視していきたい。そうすることによって、評価したことが指導と結び付き、子ども一人一人が意欲をもってことばの力を付けられると考えたからである。

指導に生きる評価をするためには、子どもたちの生活の中からどのように細やかにことばの実態をとらえられるか、子どもがどのように学び、ことばの力を身に付けているか、身に付いたことばを生きて働く姿としてどうとらえられるかなどに目を向けていくことが不可欠である。生きる力を育むためには、単に学んだ結果のみを評定するのではなく、指導と評価の一体化を図ることが求められているのである。

生きる力を育む指導と評価の一体化を図るために、次のようなことに留意したい。

- ① 指導と評価を一連のものとしてとらえ、単元・授業導入前、展開時、終末時（後）の評価を綿密に関連させること。
- ② 学び続ける意欲や態度が育つために、一人一人の成長をとらえた評価になるよう配慮すること。
- ③ 指導者と子どもの双方にとって、無理のない計画を立て、必然性や必要感を有するとともに、他と心をつ結びつつ進められるような評価にすること。
- ④ 評価が子ども主体であるということに目を向け、自己評価力や相互評価力が育つように配慮すること。

4 研究の内容と方法

(1) 子ども主体の授業を創出するために、子ども一人一人のことばの生活に根ざした単元・授業を構想する。

子どもが主体性をもって学習に取り組むためには、一人一人の子どものことばの生活を見つめ、その興味・関心・必要感やことばの力の実態を的確に把握することが欠かせない。子ども一人一人のことばの生活に根ざした「課題」を設定することに心を配るとともに、個に応じたさまざまな学びが成立するような「場」を設け、目的に応じて学習材を編成していきたい。

(2) 基礎・基本となることばの力を確実に身に付けることができるよう、次のことを行う。

- ① 身に付けさせたいことばの力を明確にする。

6カ年を見通して、それぞれの単元の中で、どのようなことばの力を身に付けさせるかを明確にしておくことが欠かせない。

- ② 必然性のある言語活動を位置付ける。

その子にとっての基礎・基本となる「話す・聞く」「書く」「読む」ことばの力の実態をとらえ、必然性をもたせて学ぶ過程で、生きて働く力として身に付けることができるような単

元・授業を構想し、手引きしていくことが大切になってくる。

(3) 学習指導に生きる評価を行うために、次のことに留意する。

① 子どもに身に付けさせたいことばの力が、単元・授業導入前、展開時、終末時（後）において、どのような状況であるのかを把握する。

評価を指導に生かすためには、子どものことばの力を把握しておき、身に付けさせたいことばの力を付けていくための指導・支援を明確にしておくことが不可欠である。

② ことばの力を学ぶ過程における評価のあり方を明確にする。

指導者が、子ども一人一人を適切に評価しなければ、評価したことを学習指導に生かすことが十分にはできない。評価規準や評価基準、評価の観点、方法などを明確にすることによって、学ぶ過程で、どう意欲や態度が育ち、ことばの力はどう身に付きつつあるのか、どう身に付いたのかといったことを、客観的に、単元・授業・活動に応じて細やかに把握できるようにしたい。

また、本研究にあたっては、「評価規準」と「評価基準」の二つの文言を次のように定義しておきたい。身に付けさせたいことばの力を明確にし、それを系統的にとらえたものが評価規準（のり準）である。これまでの実践研究で取り組んできた国語能力系統表作りが、規準の明確化、細分化につながる。その一つの規準がどのように達成されているかをとらえる評価基準（もと準）が判断基準である。実践や経験の中からその基準を明らかにすることが、次に求められることになる。「評価及び指導要録の手引き」などをもとに、指導者自らの基準を明確にするとともに、互いの基準を練り合うことで、より客観性がある判断基準を創出したい。

例 規準・・・心に強く残ったことを中心に物語の感想を書く。

基準・・・A：作品のテーマに関わる部分や表現に着目し、自分の考えと記述とを結んで書いている。

B：心に残ったことを中心に、部分的な引用や要約を使いながら物語の感想を書いている。

C：あらすじや場面のできごとに添えて、短い自分の感想を書いている。

上記の「例」では「規準」の文末を「……書く」としたのは、「規準」を「子どもに付けた力をとらえたもの」と考えたからである。

そうして、この評価規準並びに判断基準をもとに、6カ年を見通した指導計画・評価計画を作成したい。

(4) 子ども一人一人が主体的・自覚的にことばを学び続けようとする意欲・態度を育てるために、単元展開の過程に応じた、指導者の指導・支援と評価のあり方を検討する。

① ことばの生活への目を開かせ、関心をもたせ、課題意識を育てるための日常的な指導・支援と評価

② 自身にかかわることとして、ことばを学ぶべき課題へと高めるための指導・支援と評価

③ 課題を追求する過程で、自らの学びやことばへの認識を深めるための指導・支援と評価

④ 自己の学びを振り返り、身に付けたことばの力や次への課題を確認するための指導・支援と評価

⑤ 学習終了後、身に付けたことばの力やことばの学びへの意欲が「総合的な学習の時間」や他教科等、生活の場で生かされることへの見通しと、実際に生かされたことへの評価

(5) 主体的・自覚的に学ぶ力を付けるために、次のことを行う。

① 他とかかわり合いながら学ぶ力を育てる。

主体的・自覚的に学ぶ力を付けるためには、他とかかわり合う力は欠かせない。他者と出会う中で、自己の存在をとらえ直すことや、自己を振り返るための多様な視点を得ることができる。特に国語科では、他とかかわり合うための、伝え合い通じ合う力が育つよう計画的に指導・支援を試みる。さらに、学ぶことの意味をとらえ合う活動や子ども同士の評価基準を練り合う活動など、他とかかわり合いながら自己を評価する目を育てる活動を模索していきたい。

② 自己の学びを確認する力を育てる。

学習に対する自己の取り組み方や考えたことなどを振り返り、記録として残していく作業が大事になる。「学習の記録」をまとめることを通して、学ぶことの価値や、次への課題をとらえる力が育ってくるのである。特に国語科では、必要なことを記録として書き記す力、継続して記録を書き重ねる力、「前書き」や「後書き」を書く力等が育つよう、計画的に指導していくことが求められる。さらに、自己評価の基準そのものや基準の変容へと目を向けていきたい。

(6) 「総合的な学習の時間」や他教科等との連携を図り、年間計画を作成する。

「総合的な学習の時間」や他教科等との連携を図ることにより、子どもの生活に根ざしたことばの力を育てる場が豊かに、必然性をもって生じてくる。このように必然性をもった言語活動の場が年間、さらには6年間を見通して計画されることにより、身に付けたことばの力を発展・応用しながら繰り返し学んでいくことができる。「総合的な学習の時間」や他教科等との連携を図る中で、生きて働くことばの力、あるいは基礎・基本となることばの力はより着実に身に付けられるであろう。互いのねらい(本質)を生かし合うことや多様な連携の姿を探ることに留意しながら、年間計画を作成したい。

(7) 子どものことばの生活を豊かにするための環境を整える。

ことばの力を育てるためには、子どものことばの生活そのものを豊かにするための働きかけが大事になってくる。例えば、次のようなことに心を配りたい。

① 図書館の効果的な利用を図る。

情報センターとしての利用だけではなく、読むことの楽しさを味わう場としての図書館の存在は、ことばの生活だけでなく、子どもの心を育てるうえでも大事になってくる。朝の読書や読み聞かせなど、読書への取り組みとともに、学校や地域の図書館の利用を子どものことばの生活の中に位置付ける。

② 『作文読本』の効果的な活用を図る。

徳島県の子どもの書く力を育てるための月刊誌である。書く技術の育成面だけでなく、書くことを子どもの生活に位置付けるためにも、ぜひその活用を図りたい。

③ 学級や学校の言語環境づくりに心がける。

音声言語環境としての指導者の話しことばや校内放送、文字言語環境としての背面黑板や掲示板、新聞などの活用を図る。